

小林秀雄著『本居宣長』：二十四章主題

《『其のしな[喜怒哀楽の情(こころ。物:場 C')]'にしたがひて(D1の至大化)、感ずる所[即ち経験(D1の至大化)]が物のあはれ(D1の至大化)也』(『紫文要領』)と、「日常言語(F)の表現力(Eの至大化)」との「関係論」的纏め。つまり、「表現力(ながむる)Eの至大化=『物の哀をしる』D1の至大化)」について》

①『大かた人の情(こころ)のあるやう』[即ち、私達の経験の世界(物:場 C')]②在るがままの人生(物:場 C')③物語の世界(物:場 C')④『其のしな』[喜怒哀楽の情(こころ。物:場 C')]⇒からの関係:①が②として『心にこめがたい』(なげく:D1の至大化)といふ理由で語られる③でもある[つまり、①は③と同様『喜怒哀楽の人間の表情』の世界]。「⑤:故に『④にしたがひて(D1の至大化)、感ずる所[即ち経験(D1の至大化)]が物のあはれ(D1の至大化)也』(『紫文要領』)と』⇒「⑥:日常言語」(⑤的概念F)⇒E:そして『物のあはれ(D1の至大化)』は、『源氏』にどう現れてゐるかと言へば、『誰にも親しい④の表現力(Eの至大化)』として、それが現れてゐるのだと[つまり、P221『尋常な談話の関係(即ち、Eの至大化=D1の至大化)』『一般人の普通の言語(F)表現(Eの至大化)の世界』、即ちP225『自然(Eの至大化)、我物(F)なる』『平生の言語(F)』としてである、と]「(⑥への距離獲得:Eの至大化)⇒⑦宣長(△梓):①への適應正常。

①『雅言』(物:場 C')⇒からの関係:①となると、『れきれきの②にても、「③:てには(てにをは)のかなはぬ(Eの至小化)事ままあり』といふ事になる」(D1の至小化)⇒「④:『平生の言語』」(③的對立概念F)⇒E:『④は、いかに⑤といへども、てには(てにをは)のかなはぬ(Eの至小化)と云ふ事なし(Eの至大化)。自然、我物[『おのが腹の内の物』(F)]なる(Eの至大化)ゆへ也』。『自然(Eの至大化)、我物(F)なる』『平生の言語(F)』をあやつつてゐる(F⇒Eの至大化)といふ事が、言語(F)の正しい使ひ方(Eの至大化)についての本能的な智慧(合體Eの至大化)を働かせてゐる、といふその事なのだ」(③への距離獲得:Eの至大化)⇒②歌よみ⑤愚人(△梓):④への適應正常

(物:場 C')...

①『大かた人の情(こころ)のあるやう』[即ち、私達の経験の世界(物:場 C')]②在るがままの人生(物:場 C')③物語の世界(物:場 C')④『其のしな』[喜怒哀楽の情(こころ。物:場 C')]

~~~~~

①『雅言』(物:場 C')

からの関係(D1の至大化)

①が②として『心にこめがたい』(なげく:D1の至大化)といふ理由で語られる③でもある[つまり、①は③と同様『喜怒哀楽の人間の表情』の世界]。「⑤:故に『④にしたがひて(D1の至大化)、感ずる所[即ち経験(D1の至大化)]が物のあはれ(D1の至大化)也』(『紫文要領』)と」

①となると、『れきれきの②にても、「③:てには(てにをは)のかなはぬ(Eの至小化)事ままあり』といふ事になる」(D1の至小化)

F(言葉・概念)...

「⑥:日常言語」(⑤的概念F)

~~~~~

「④:『平生の言語』」(③的對立概念F)

E: [F(言葉・概念)との附き合ひ方・用法]...「So called」Fと(△梓)との距離獲得」(Eの至大化)。

\*そして『物のあはれ(D1の至大化)』は、『源氏』にどう現れてゐるかと言へば、『誰にも親しい④の表現力(Eの至大化)』として、それが現れてゐるのだと[つまり、P221『尋常な談話の関係(即ち、Eの至大化=D1の至大化)』『一般人の普通の言語(F)表現(Eの至大化)の世界』、即ちP225『自然(Eの至大化)、我物(F)なる』『平生の言語(F)』としてである、と]「(⑥への距離獲得:Eの至大化)

~~~~~  
\*『④は、いかに⑤といへども、てには(てにをは)のかなはぬ(Eの至小化)と云ふ事なし(Eの至大化)。自然、我物[『おのが腹の内の物』(F)]なる(Eの至大化)ゆへ也』。『自然(Eの至大化)、我物(F)なる』『平生の言語(F)』をあやつつてゐる(F⇒Eの至大化)といふ事が、言語(F)の正しい使ひ方(Eの至大化)についての本能的な智慧(合體Eの至大化)を働かせてゐる、といふその事なのだ」(③への距離獲得:Eの至大化)

(△梓)

⑦宣長/②歌よみ⑤愚人